第1話

# 「そうじをすると、お金が手に入るのか？」

# 1

爽やかな4月の風が頬をなでていった。

駅から会社までの通勤の道のりを、山村圭介は腕を大きく振って歩いていた。いつものように橋を渡り真っすぐ進もうとして、「工事中の看板」に突き当たった。新しい大きなビルができるらしく、ガスやら電気の埋設工事のため迂回を余儀なくされた。

時計を気にしつつ、川沿いの道を早足で右に折れた。そして、ちょっと近道をするため、公園の中をぬけることにした。つい先日までは、その公園を満開の桜がピンクに染めていたが、いつしか葉桜となり目に眩いばかりの新緑となっていた。「ハア～と」大きく息を吸い込んだ。

その時である。圭介は、公園のベンチのあたりにいる1人の老人に目が留まった。手に袋を持ってゴミを拾っているようだ。別にそのこと自体珍しいことではない。「地域の奉仕活動」か何かであろう。しかし、どこか違和感を抱いた。近づいてみて、そ





の違和感は具体的なものになった。

その老人は、「スーツ」を着ていたのだ。70歳はとうに超えていよう。いや、80近いかもしれぬ。今流行りのイタリアンスーツではなく、往年のイングランド調の背広をパリッと着こなしている。圭介のような素人が見ても、ずいぶん高そうな代物に見えた。要するに「紳士」なのだ。

老紳士は右手に軍手をはめて、左手には2つのゴミ袋を持っている。空缶とその他のゴミを分別しながら、黙々と拾っている。圭介は、ふと立ち止まり思った。

(ひょっとして、ボケ老人かな)

「認知症」になった伯父がいる。夜中に突然スーツを着て、「今から会社へ行く。緊急役員会の招集があった」と外へ飛び出して行った。伯母が慌てて止めたが、そのままタクシーに乗ってしまった。会社のガードマンが警察に通報し、大事になってしまったと聞いている。そのことが頭にあったので、ちょっと心配になったのだ。

でも、仮にそうだとしても、交通事故の心配もないし、まぁ大丈夫だろう。

（むやみに他人事に首を突っ込まないほうがいいな）

そう思うと、圭介は会社への道を急いだ。

山村圭介33歳。独身。ガスショップ「田中エナジー」の営業兼工事マネージャーをしている。田中エナジーは、「ガスの配管工事」や「ガス器具の販売」を主体に行ってきたが、近年は収益率の低下から「建築リフォーム」に進出し、もっぱら工務店のような業務に力を注いでいる。そのため、ここ数年で社員が20人と3倍に増えた。

圭介は田中エナジーの社長・田中修の甥っ子で、大学を卒業してすぐ入社した。最初はガスの取付け工事だけしていたが、社長の「親類の会社以外のところで一度働いたほうがいいだろう」という方針で、3年間「知り合いの工務店」へ修業に出された。そして戻ってすぐに工事マネージャーとして、「リフォーム部門」の立ち上げを任されたのだった。

「おい、圭介。ちょっと来てくれ」

出社するなり、田中社長に呼ばれた。事務所の隣にある作業場へと促されて付いて





いった。圭介は心の中で「またか…」と思った。

「なんとかならんかの～、これ」

社長は床を指差して言った。そこには、かんな屑や配線コード、パイプの切れ端が散乱していた。いつも、言われると「そうじ」をしているが、長続きはしなかった。「工事マネージャー」である圭介が厳しく言わないので、８人の部下もちゃんと片付けようとしない。

社長がうるさく言うと、その場にいる者が慌ててホウキとチリトリを持ってそうじを始める。だが、また3日もすると元通り。言う方も、言われる方も愉快ではなかった。そんな状態が、「リフォーム部門」がスタートして3年もの間繰り返されてきた。

「お前なぁ、何回言ったらわかるんかなぁ～、ちゃんとそうじしなきゃいかんだろう」

「…すみません。今からやります」

「いや、そうじゃなくってなぁ。いいかぁ、毎日、仕事が終わったら日課にしたらいいじゃないか、そんなに大変なことじゃぁないだろうに…」

温厚な社長の田中だが、今日は少し口調が荒い。圭介は無言でホウキを手に取ると、

さっと大きなゴミをかき集めた。
「おいおい、聞いてるんか」
「聞いてますよ。わかってますけどね、いつも人使いが荒くて、そうじなんてする暇ないでしょう。一昨日だってそうでしょう。7時に事務所に戻ってきたら、『二丁目の銭湯のボイラーを見てやってきてくれ』でしょ。こっちは、飯も食べずに夜中の12時近くまで修理してたんですよ」
「…いや、悪い悪い、まぁ、そう怒るなよ。圭介が頑張っているのはよくわかっているよ。リフォームもようやく軌道に乗りつつあるし、それもみんな圭介のおかげだよ」
「だったら…」
「でもな、俺の性分というかさ、汚れているのは、とにかく気になって仕方がないんだ」

圭介はちょっとムキになって言い返す。
「別に、仕事上、困るほど汚れているわけじゃないでしょう。つまずいて転ぶほどゴミが落ちているわけでもないですし、少しくらいいいじゃないですか」
「…う〜ん、だけどなぁ」





圭介はゴミ袋にかき集めた廃材を押し込んで、
「さあ、これでいいでしょ。少しはさっぱりしましたよ」
社長はしげしげと床を眺めた。
「まだ、小さな汚れがあちこちにあるだろう、もっとだねぇ、こう丁寧にやって、キレイさっぱりした感じにはできんのかね…」
「社長、こうも言いますよね。『アイデアは雑然の中から生まれる』って。この前テレビを見てたら、ナントカっていう小説家が『整理・整頓していないグチャグチャの机の上から名作が生まれる』って言ってましたよ」
「小説家とガス屋を一緒にするなよ」
「じゃぁですね、お聞きしますけど。いつも社長は、キレイ、キレイって言うけど、**そうじをすると売上が上がるんですか？　お金が手に入るんですか？**」
社長は言葉に詰まってしまった。「そうじをすると売上が上がるのか？　お金が手に入るのか？」。そんなことは考えたこともなかった。社員に面と向かって訊かれると、答えようがない。言葉に詰まって、ちょっと力んで社長が言った。
**「とにかくだなぁ。キレイにすると、すごく気持ちがいいんだよ！」**

話はここまでになった。次々と社員が出勤しはじめ、作業着に着替え、それぞれ現場へと飛び出していった。

圭介は別に怠け癖があったり、いいかげんな性格というわけではなかった。いや、それよりも勤勉で、かつ頭もよかった。新しくつくった「リフォーム部門」が収支トントンのところまでこんなに早く達成できたのも、圭介の地道な努力と部下の統率力によるものだ。若い社員は、なかなか「精神論だけ」ではついて来ない。**心の底から「よし、それならば、やってやろう！」と納得させないといけない**のだ。

圭介にはそれができた。しかし、それだけに、圭介自身も少々理屈っぽく、上司の命令があったとしても、「理路整然とした説明」がないと動かないところがあった。

圭介からしてみれば、そうじをするのが、嫌いなわけではなかったが、そこまでの「そうじの重要性」を感じていなかった。作業場の床の汚れが気になりだしたら、ちゃんと部下に号令をかけてみんなで一斉にそうじをしていた。たぶん、2～3週間に一回くらいは、そうじをしているだろう。そうじなんて、仕事に支障が出ない限り、そ





の程度でいいものだと思っていた。

あまり社長がうるさいので、ついつい、

「そうじをすると売上が上がるんですか？　お金が手に入るんですか？」

などと言ってしまったが、これは社長がしつこく言うので、日頃から思っていることだった。そうじを30分する時間があったら、営業を一軒でも取った方が確実に「利益」につながるはずだ。だって、「お客さん」は、お金を払ってくれるが、「そうじ」はお金を払ってはくれないのだから…。

「よし、今日は、牧原さんちの仕事の帰りに、大矢さんちのお爺ちゃんの家に寄ってみよう」

山村圭介は、部下と一緒に勢いよく事務所を飛び出して行った。

## 2

翌朝は、小雨が降っていた。

昨日と同じように、工事中の道を迂回して公園の中に入った。すると、あの老人がまたしてもゴミを拾っていた。それも、この小雨の中、傘もささずに黙々とゴミ拾いをしているのだ。

夕べ帰宅して、伯母に電話してみた。「公園の老人」を見たせいか、その後の具合が気になったのだった。幼い頃、ずいぶんと可愛がってくれた伯父だったが、最近はボケが進行していて、毎日一緒に暮らしている伯母は、すでに伯父の面倒をみるのに精根尽き果てていた。ほっておくと、勝手に家を出て行ってしまう。かといって、部屋に鍵をかけておくと、ドンドンと叩いて大騒ぎになる。

「私、もう疲れたわ。おとうさんを、どこかの施設にお願いしようと思うの…」

圭介はいたたまれなくなって電話を切った。

そんなこともあり、今度は公園の老人のことが気になってしまった。この小雨の中、大勢ではなく、たった1人で老人がゴミ拾いをしているというのは、どう見ても異常な光景に見えた。

腕時計を見ると、出社時間にはまだ30分ほど余裕があった。腰を屈めて黙々とゴミ





拾いをして歩いている老人の後を、10メートルほど後ろから付いていった。木立に隠れながら、気づかれぬように。圭介は迷っていた。声をかけようかどうしようかと。しかし、もし「ボケ老人」だったら、どうしたものか。会話になるのだろうか。

そんなことを考えていて、ふっと気づくと老人が踵を返して圭介の方に歩いてきた。急なことで、動けなくなってしまった。そして、ベンチをはさんで向き合う形になった。老人が口を開いた。

「おいキミ。何かワシに用かね？」

そのしっかりとした口調に、圭介は驚きを隠せなかった。見てくれは70代でも、声には50歳くらいの若々しさがある。

「い、いえ…別に」

「別に、ということはないじゃろう。さっきからワシの後を付けてきて。最初は何者かと心配したが、見れば普通のサラリーマンのようじゃしな。しかし、知らぬ者にずっと後を付け回されるのは愉快ではないのう…」

「す、すみません」
圭介は赤面した。どうやらボケ老人ではなさそうだ。となると、ますます疑問が膨らんだ。なぜ、ゴミを拾っているのか。
「あの、1つ、聞いてもいいですか」
「何じゃな、いきなり…。尾行の次は質問かな？」
初対面で、まだ一言二言しか言葉を交わしていなかったが、老人の瞳の奥に、なにやら「優しさ」のようなものを感じとった。ちょっとうるさそうな人物ではあるが、敵をつくらないタイプの人間に見えたのだ。

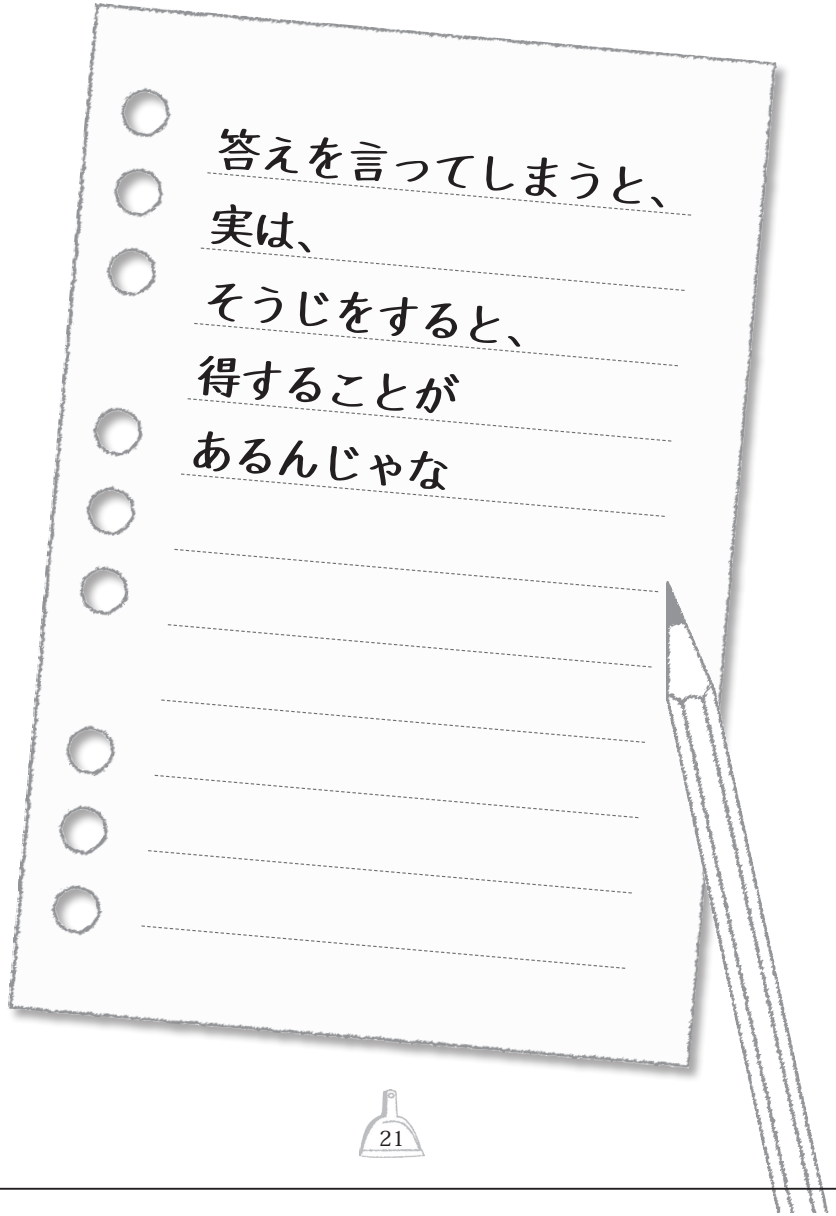
「申し訳ありません。私はこの近所の会社に勤める者なんですが、昨日、通勤の途中で初めてあなたをお見受けしたんです。公園の中でゴミを拾っておられるのを…」
「おお、そうだったのかね。それで…」
「それで、なんというか、どうしてゴミを拾っておられるのか、理由をおうかがいしてもよろしいでしょうか？　失礼ながらお役所の清掃員ではなさそうだし、かといって地域の清掃ボランティアのようにも見受けられません…」

「なんだ、そんなことか…。ただ、拾いたいから拾っているんじゃよ」
「拾いたいですって？」
「そうじゃよ。考えてみたまえ。拾いたくなければ、拾うわけがないじゃろう」
少し雨脚が弱くなった。圭介は、質問を変えてみた。
「では、なぜ拾いたいんですか。拾うと、何かよいことがあるんですか？」
「ほう、そうきたかね。よいことがないと拾っちゃいけないのかな？」
「…そんなわけではないですが。人は、何か自分にとって得することがないと、普通は行動に移さないものでしょう。違いますか？」
「うほう、なかなかはっきり言うヤツじゃな。まぁ、確かに、キミの言うとおりかもしれんな」

老人は、なんだか突然に現れた客人を喜ぶかのように、表情を崩して答えた。
「まぁ、最初に答えを言うのは好きではないが、**答えを言ってしまうと、実は、そうじをすると、得することがあるんじゃな**」







「得って何ですか？」
圭介は、急に昨日の社長との話を思い出した。「そうじをすると、売上が上がるのか」と質問したが、社長はちゃんとは答えられなかった。この老人なら、なんと答えるのだろうか。しかし、次に、圭介が思ってもみないことを言った。
「別に、拾いたくないなら、拾わんでもいいよ」
「え⁉」
「聞こえんかったかな。別に拾いたくないなら、拾わんでもいいと言ったんじゃ」

圭介はこの言葉に「カチン」ときた。「ゴミ拾いをすると、何か得することがある」と老人は言う。「その得とは何なのか？」と聞いたのだ。それなのに、「別に、拾いたくないなら、拾わんでもいいよ」と言う。こちらだって、別に、「拾いたい！」とも思わない。圭介は、軽い憤(いきどお)りを感じて言い返した。
「ひょっとして、何か今までの人生で悪いことをして、それの『罪滅ぼし』か何かなのですか？」
「わっははは。面白いことを言うのう。まぁ、そこまで言うのなら1つ、教えてやろう。





耳を貸しなさい」
そう言うと老人はベンチをぐるりと回って、圭介に近づいてきた。そして、立ち尽くす圭介の耳元でポツリと囁(ささや)いた。

**「拾った人だけがわかるんじゃよ」**

何だかバカにされた気分だった。キョトンとした圭介を尻目に、老人はまた「ゴミ拾い」を始めた。腕時計を見ると、始業時間の5分前だった。「遅刻だ！」老人に一礼をして慌てて駆け出した。

## 3

それから1週間が経った。通勤の際に、公園をぬけるのが近道ではあったが、またあの老人に会うのがなんとなく嫌で、わざと遠回りして歩いた。

「拾った人だけがわかるんじゃよ」
というあのセリフが頭の中でグルグルと回っていた。何度も消し去ろうとしたが、それは大きくなるばかりだった。圭介は理屈が先行するが、気になることがあると、とことん物事を調べる性分である。もう一度、あの老人に、「そんな意地悪を言わないで、ゴミを拾って得する理由を教えてくださいよ」と聞いてみたい気持ちが心の中で膨らんでいった。

その日は、穏やかな五月晴れだった。工事の予定もなく、事務所で「お得意先へのＦＡＸＤＭ」をつくっていた。ふと気づくと、もう1時を回っていた。近くの食堂へランチを食べに出掛けた。

田中エナジーは商店街の中にある。その何軒か並びには、幼稚園があった。「若葉（わかば）幼稚園」という。黄色の鉄柵越しに、園内の広場で遊ぶ子どもたちを見ながら、通り過ぎようとしたその時だった。

足元に、「コーン！」と何かが当たった。それは「空缶」だった。気づかずに、蹴飛ばしてしまい、音をたてて数メートル先まで転がってしまった。





次の瞬間、圭介はその空缶に腰を屈めて手を伸ばしていた。手に取って、ハッとした。
（この空缶、どうしよう……）

圭介は、自分が取った行動に、自分自身で驚いていた。生まれてこの方、一度も路上の空缶など拾ったことがなかったからである。無意識にあたりをキョロキョロと見回した。誰かに見られていないかと思ったのだ。商店街である。当然のこと、人通りはある。しかし、今の圭介には、誰も気を留めていないようである。

ふと気づくと、幼稚園の窓に、若い女の先生の姿が見えた。遠くて、目線まではわからなかったが、どうも、こちらを見ているような気がした。いや、気のせいかもしれない。なのに、顔がものすごく熱くほてっていた。おそらく、真っ赤になっているに違いなかった。

「いかん、いかん」

空缶を手にして、歩道に立ち尽くしている自分に気がついた。
（すぐに、これをどこかに捨てなければ）

小走りに、5メートル先の酒屋さんまで駆けた。そして、ジュースの自動販売機の横に設置されていた「空缶入れ」に、カランとほおり込んだ。

ランチから戻ってくると、部下の草野正平（くさのしょうへい）がニヤリとして近づいてきた。

「えへへ、偶然、見ちゃいましたよリーダー。さっき道端の空缶、拾ってたでしょ」

圭介はまたまた顔が赤くなった。返事に窮して、

「え？　そ、そうだったっけ？」

と答えると、

「恥ずかしがらなくたって、いいじゃないですか。カッコイイっすよね」

とそれだけ言って、正平は仕事に戻っていった。圭介は、気になって奥を覗いた。今の会話を社長に聞かれたのではないかと気になったのだった。作業場には、誰もいなかった。

# 4

翌朝、圭介はいつもより早めに家を出た。あの老人に会うためである。しかし、当然のことだが、約束をしているわけではない。とにかく、公園に行ってみないことにはわからない…。

「いたっ」

思わず声に出てしまった。あのスーツ姿の老人が、今日も黙々とゴミを拾っていた。前の日に、「野球大会」でもあったのだろうか。その日の公園はやたらとゴミが目についた。ベンチのあたりは、空缶と弁当のゴミが散乱していた。

圭介が歩いてくる姿を見ると、老人は、

「おお…、おはようさん」

と挨拶をしてきた。圭介は、

「おはようございます」





とピョコンとお辞儀をして答えた。

「あのう…、この前はどうも」

「はて、何か、ワシがしたかな？」

「い、いや。ありがとうございました」

「何が…？」

「何がって…。そう言われると、確かに、何もありませんよね」

「ふぅむ…」

老人は、拾う手を休めて圭介の方を見てニヤニヤ笑っている。

「今日は、この前より、キミが来る時間が早いようじゃな」

「はい。ちょっとあなたにお聞きしたいことがあって」

「ほう、何かな」

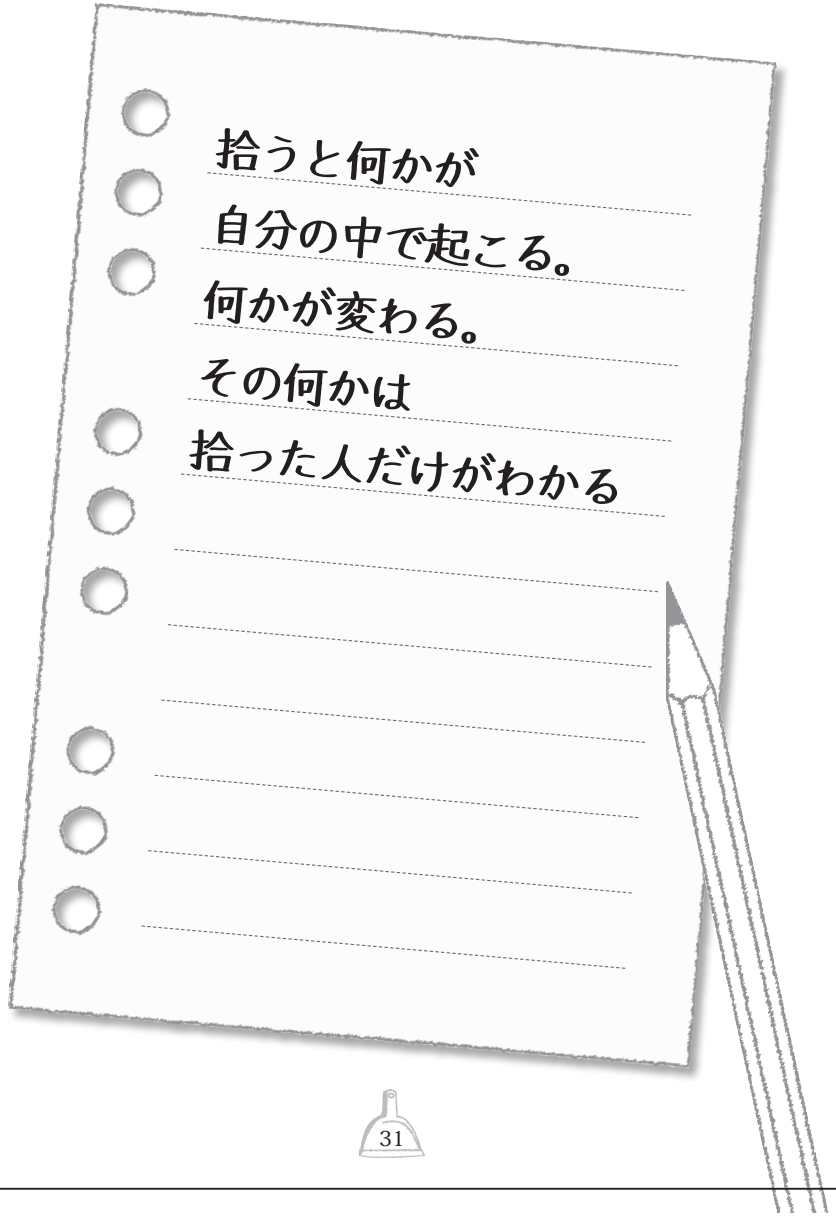
そう言うなり、老人は再びゴミ拾いをはじめだした。

圭介は、ゴミ拾いをする老人の後ろをついて歩きながら、昨日の出来事を話し始め

た。生まれて初めて、路上の「空缶」を拾ったことを。
「この前、おっしゃいましたよね。拾った人だけがわかるって」
老人は一瞬、手を止めて、
「ほほう、キミは拾ってみて、何かわかったのかな？」
「いいえ、ぜんぜん」
「そうじゃろうなぁ。1つ空缶を拾っただけではなぁ…」
圭介は少々ムッとしたが、そのまま堪えて聞き返した。
「先日、拾えば何が得になるかわかるって、おっしゃったでしょう」
「おや？　そんなこと、ワシが言ったかな？」
「言いました」
「そうじゃったかのう…。では、ちょっと、言い直そう。**拾うと何かが自分の中で起こる。何かが変わる。その何かは拾った人だけがわかる、という意味で言ったのじゃ。どうじゃな、何か起きんかったかな？**」
圭介は、まるで「占い師」に導かれるかのように、昨日のその瞬間の気持ちを素直







に話した。誰かに見られているんじゃないかと、恥ずかしくて顔が赤くなったことを。部下にからかわれて、再び赤面したことも。

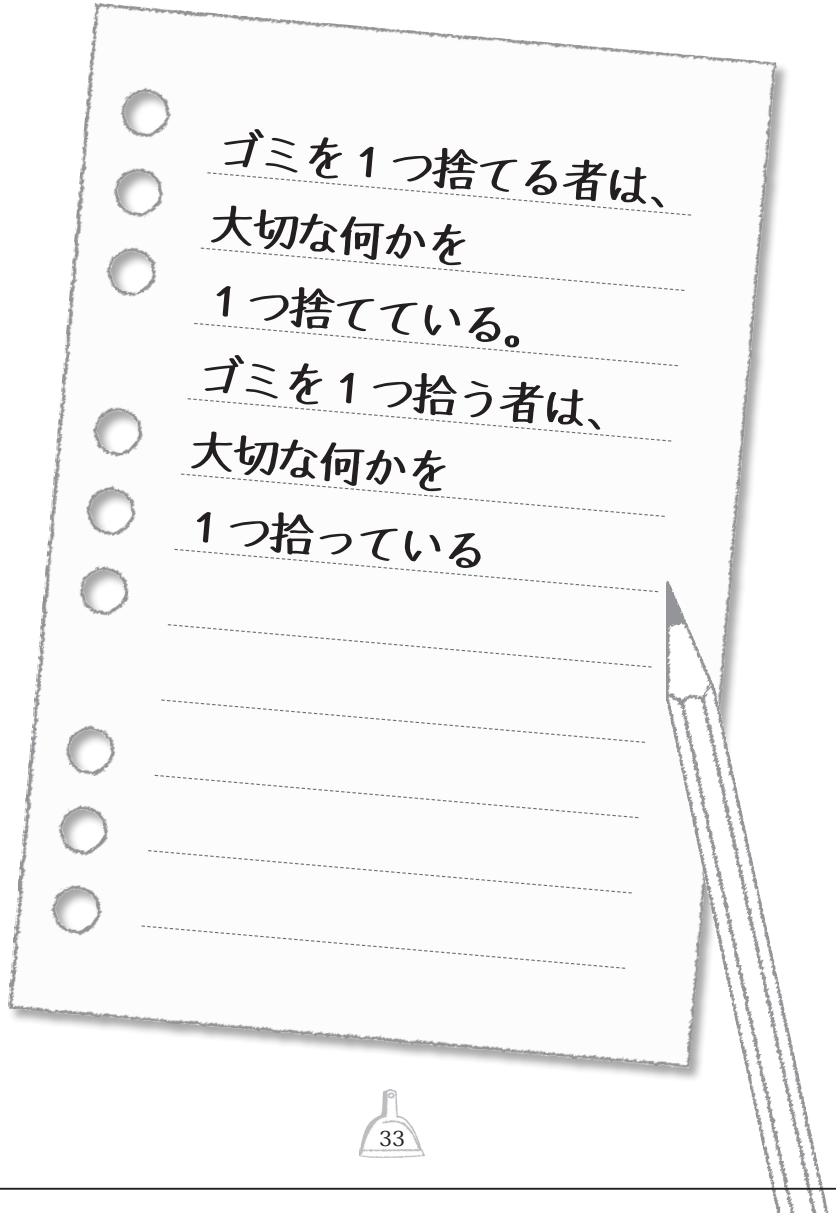
圭介には可愛がっている姉の子ども、つまり甥っ子がいた。「若葉幼稚園」とは別の園ではあるが、同じ幼稚園児である。目の前に空缶が転がっていた。よくよく、拾ってしまった理由を考えてみると、「子どもが転んでケガをしちゃいけないな」と思った。それが無意識に行動に出たのかもしれない。

次に「自分は偽善者であり、調子のいい人間だ」ということに思い当たった。「たった1つ空缶を拾っただけで、今までの悪行を全部許してもらおう」などと思っているんじゃないか。「人に褒められたい」と思っているんじゃないか。たった1つ空缶を拾っただけで「いい人」に見られようと考えてしまったことが、自分でも許せないのだ。

老人は、黙々とゴミを拾いながら、「うん…、うん…」と言って相槌を打った。そして、「たった一個の空缶で、まぁ、ずいぶんと考え込んでしまったものじゃのう。なんとも理屈っぽいヤツじゃ。そんなことをしていたら疲れるじゃろう。こりゃ百個拾った







らどうなることやら。本当に頭から火が出るかもしれん。ハハハ…」
「……」
「ではな、もう1つ教えてやろう。**ゴミを1つ捨てる者は、大切な何かを1つ捨てている。ゴミを1つ拾う者は、大切な何かを1つ拾っているんじゃな**」
「その大切な何かが、『得する』ってことですか？」
「バカもん！　お前はすぐに得、得ってな。あんまり損だ得だと考えるな。それより、1つ空缶を拾ってみたことで、何かを1つ拾った感覚を感じはしなかったかな？」
圭介にはすぐには答えられなかった。だが、あんなに「無性に恥ずかしかったという気持ち」は初めての経験だった。たしかに……、「何かが自分の心の中で起きた」ことには違いはなかった。

## 5

老人と話をしたその日、事務所に着くなり、圭介は「作業場のそうじ」を始めた。





いつも始業時間の30分前には出社しているが、仕事に取り掛かる前に新聞を読んだり、みんなでコーヒーを飲んだりして過ごしていた。それが、今日に限って圭介がホウキとチリトリを持ってそうじを始めたので、次々と出勤してくる部下が異様な目で見た。
やはりというか、草野正平がからかってきた。

「あれ〜、リーダー、どうしたんですか。朝から熱でも出たんですか」
「いや、別に…。ちょっと汚れているのが気になって、そうじしているだけだよ…」
老人の言った「拾った人だけがわかる」「1つ拾う者は、大切な何かを1つ拾っている」という2つの言葉が気になって仕方がなかった。だったら、これはもう「自分で実験して経験」するしかない。証明するしかない。部下たちにさんざん冷やかされて、顔がまた赤くなった。それでも、
「まぁ、ちょっと放っておいてくれよ。別に『一緒にそうじしよう』なんて言わないから。ちょっとな、気が向いただけさ」
それだけ言って、作業場の隅々までなめるようにキレイにした。

社長の言葉が蘇った。

「とにかくだなぁ。キレイにすると、すごく気持ちがいいんだよ！」

あの時はバカバカしく思えたが、こうして自分1人で職場をそうじしてみて、こみ上げてくる感覚に、「苦笑い」するしかなかった。

**（うん。これは、たしかに、キレイにすると、すごく気持ちがいい！）**

しかし、圭介の答えはまだ見つかっていなかった。社長に以前質問した、「そうじをすると、売上が上がるのか？」と、老人に質問した「そうじをすると得なことがあるのか？」これが未解決のままだからだ。

翌朝も、また翌朝も、圭介は作業場のそうじをした。**そうじをしてキレイな1日をすごしてしまうと、そうじをしないで汚れたままでいるのが気持ち悪い**。まるで「歯磨き」のようだ。一度キレイな感覚を味わってしまうと、汚れたままの感覚が気持ち悪い。





そうこうしているうちに、そうじをするのが圭介の日課になってしまった。そして、ときおり、ブツブツと「念仏みたいな言葉」を唱えていた。「1つ拾うと、大切な何かを1つ拾っている」。

## 6

「梅雨」がやってきた。今年は、雨量が多い。「ガス乾燥機」の注文が相次いで、大忙しになった。圭介のそうじは続いていたが、「答え」が見つからないまま、時が過ぎていった。

圭介が作業場のそうじを初めて2カ月が経った。その日の朝も、いつものように事務所でタイムカードを押してから作業場に行くと、そこに先客がいた。正平だった。手にはホウキとチリトリを持っていた。

「おい、どうしたんだよ」

「どうしたんだよ、はこっちが言いたいですよ。リーダーったら、気紛れだよとか言っていたのに、ずっと毎日そうじをしてるでしょ、もう2ヵ月になりますよ」
「いや、一度やったら、そうじをしないのが気持ち悪くなってしまって、やっているだけだよ。だから、おまえは気にしなくてもいいよ」
正平は、ちょっと真面目な顔つきで言った。
「そんなわけにはいかんでしょ。まるで、部下への当て付けみたいじゃないですか」
「いや、そうじゃないんだよ。本当に、そうじをするのが気持ちよくなってしているだけだから、おまえたちへの当て付けとかじゃないんだよ」
「はいはい、わかってますって…。ちょっと、言ってみただけですよ。リーダーは遠慮なんてしないですもんね。ただ、オレは別にそうじは嫌いじゃないっすから。まぁ、オレの場合は今日だけの気紛(きまぐ)れかもしれませんけどね…」
その日は、正平の手によってほとんどそうじは終わっていて、圭介の出番はなくなっていた。仕方なく、商店街に出てみると、あちこちに空缶や菓子パンのビニール袋などのゴミが落ちているのが目に付いた。**今までも、同じ光景を見ていたはずなのに、**





**なぜ、今までは、ゴミが落ちていることに気づかなかったのだろうか？**
事務所に戻ると、「軍手」と「ゴミ袋」を手に再び通りへ出た。そして、事務所の周りの目に付く範囲のゴミを拾い始めた。
なぜこんなことをしているのか、圭介自身にもうまく説明できなかった。だが、ただ、ただ拾った。
その翌朝、困ったことが起きた。圭介が出社した時には、正平とともに部下の3人が、作業場のそうじをすませていたのだった。
そして、その1週間後には、部下全員が仕事が始まる前に「作業場のそうじ」をするようになってしまった。毎日、圭介が出社する時間には、すべてが片付いていた。とうとう、圭介の出番はなくなった。実験を続けるのは、少々困難になってきた。

# 7

さらに2ヵ月が経った。町には、ツクツクボウシの鳴き声が聞こえていた。作業場だけでなく、事務所サイドの人間も始業前に全員でそうじをするようになっていた。もともと、そんなに広いスペースではない。全員が一斉に取り掛かれば、ものの10分もかからない。かといって、「きまり」や「規則」をつくったわけではなかった。

しかも、圭介が「事務所の前のそうじ」をし始めてからしばらくすると、いつの間にかみんなもするようになってしまった。これもみんなですると、数分もかからない。最初は、事務所の両側5メートル近辺だけであったが、だんだんとそのエリアは10メートル、15メートルと広がっていった。

（…まだ、あの老人はいるだろうか？）

その翌日、2ヵ月ぶりに、公園の中をぬけて出社することにした。もちろん、老人





に会うためである。

「いた！」

かなり濃くなってきている緑のかげから、老人の姿が見えた。なんだか嬉しくなって、圭介は駆け寄った。

「おはようございます」

「おお、青年か。元気にしとったかのう」

「はい。おかげさまで」

「ずいぶんとスッキリとしたいい顔をしているのう。さて、また何か質問でもしにきたのかのう」

まるで、自分の孫でも見るような目つきで圭介を見やった。圭介は、つい先日来に起きた、社内での出来事について報告した。

「ほほう、そりゃよかったのう」

「まぁ、なんと言うか。あなたのおっしゃっていた『ゴミを1つ拾う者は、大切な何かを1つ拾っている』ということとは違うかもしれませんが、部下が何も命令してい

ないのに動いたという経験自体が乏しいので、それだけでも嬉しいですよね」
「それで…？」
老人は、少し鋭い眼光を見せた。
「それでって。何ですか」
「それだけか？　という意味じゃよ」
「あ…は、はい」
圭介は老人に「褒めてもらえる」と思っていた。それが、ちょっと冷たい口ぶりだったので、少しがっかりした。
「なんだ、キミはワシに褒めてもらいたかったのか？」
あまりにも図星だったので、「うん」と俯いてしまった。老人は、続けてこんなことを言った。

「いいかな、青年。お前がやったのは、普通のことを普通にしただけなのじゃ」
「普通…？」
「そうじゃ、普通じゃ。よいかな。そもそもゴミは落ちていないものだし、職場もキ





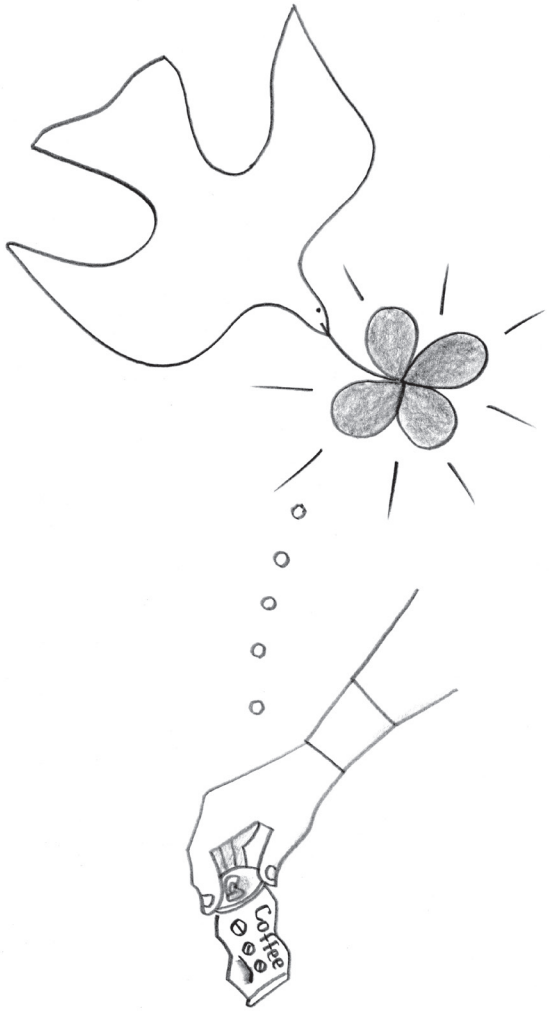
レイなものなのじゃ。誰かが汚したのじゃな。つまりマイナスの状態にあった。それをお前さんや、お前さんの仲間がみんなで元通りにしただけのことなのじゃ。商店街の通りだって、最初から汚れていたわけじゃない。まぁ、朝起きると顔を洗って歯を磨いてご飯を食べる。『習慣』という程度のことじゃ。そんな程度のことで、威張っていちゃいかん」
圭介は「ムッ」と、表情を曇らせた。「威張る」と言われて過剰に反応してしまった。けっしてそんな気持ちはない。
「おっ、怒ったか。ハハハッ！　まぁ、許せ。ワシも少々言い方が過ぎたかもしれん。ではな、ちょっとよいことを教えてやろう」
「何ですか」
「さきほど、お前さんも言ったように、以前、ワシは『ゴミを１つ拾う者は、大切な何かを１つ拾っている』と言ったな」
「はい…」
**「その大切なものを、おそらくお前さんはもう手に入れているはずじゃ」**
「え？　それは、部下が一緒にそうじをしてくれたことですか…？」

「いいや、違うな…」
「…」
「まぁいい。そのうちわかるじゃろ。自分でよく考えてみなさい。ひょっとすると、1つだけじゃなくて、たくさん拾っているかもしれんゾ」
「え？　たくさんですって？」
圭介は、まるで映画「スターウォーズ」の「ルーク」と「ヨーダ」の師弟関係のように、いつしか老人を「師」と仰ぐようになっていた。そう、「そうじの師」として。

「お前さんは、空缶を拾った時、こう思わなかったかな。1つくらい拾っても仕方がないと」
「その通りです。世の中には、それこそ何万とか、いや何億もの空缶が落ちてるに違いないんです。それを、たった1つだけ拾って『よいことをした』なんて思うのは思いあがりだし、たった1つだけじゃ、何の役にも立たないんじゃないかって…」
「でも、キミはその1つを拾った。たった1つじゃが…、ひょっとすると、それで幼稚園の子どもが転ばずにすんだかもしれん。たった1つかもしれんが、たった1つが







なければ、2つも3つも、百も、千も、万も、億も、ないのじゃ」

「……」

「そう…、**すべては、たった1つからはじまるんじゃよ。その意味で『0と1の差』は、1ではなく、実は、とてつもなく大きい…、それこそ、『0と1の差』は、百も、千も、万も、億も、違うのじゃ**」

まるで、仏教でいうところのの「禅問答」のようだった。しかし、圭介はもう老人に問い返すことなく、そのまま一礼をしてその場を立ち去った。

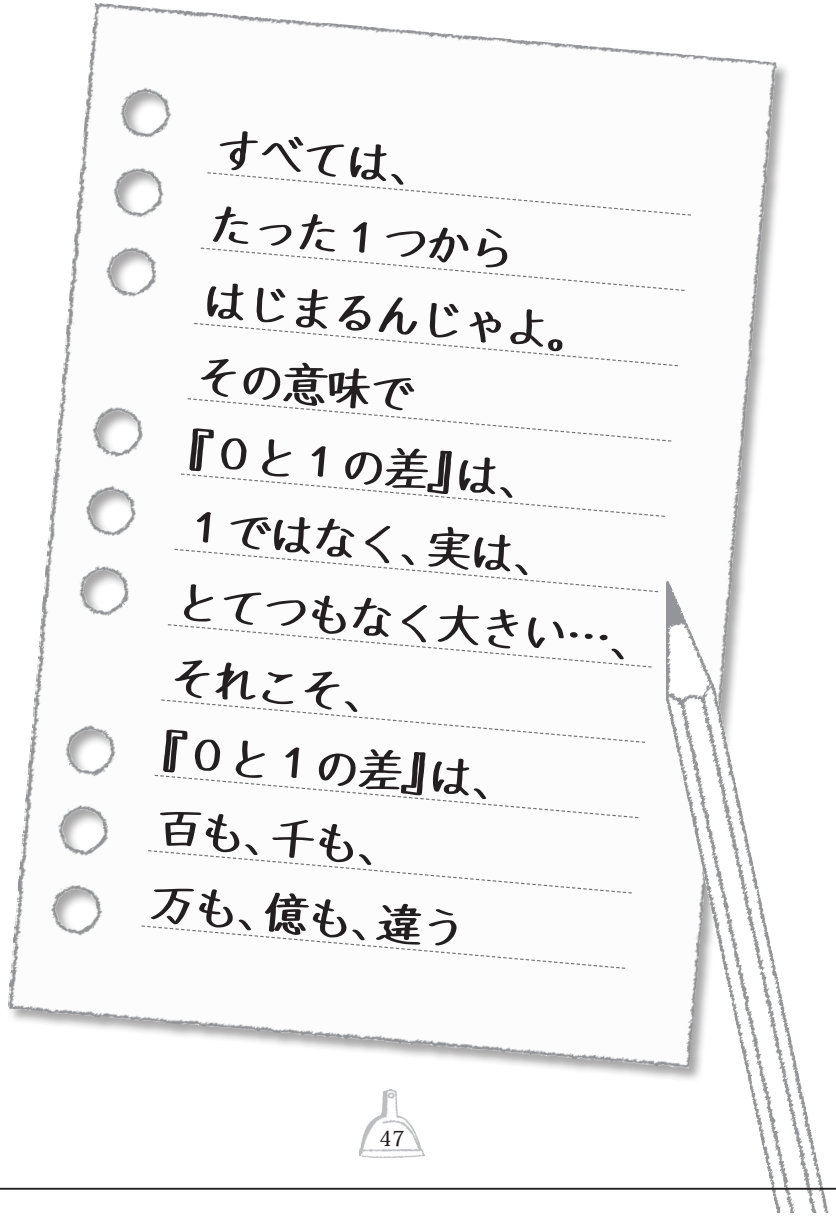
## 8

梢には、少し早く里に下りてきたアキアカネが止まっていた。

老人の宿題はなかなか解けなかった。「大切なもの」を、すでに圭介が手に入れて







いるはずだと言う。
たしかにそうじをすると精神的には清々しいし、気持ちいい。キレイになった職場、キレイになった歩道を見るのは楽しいものだ。しかし、当初、圭介が社長や老人に挑発されてそうじを始めた目的は、達成されていなかった。
「そうじをすると売上が上がるのか？　お金が手に入るのか？　得をするのか？」
実を言うと、別にそんなことはどうでもよくなっていた。そうじをするのが気持ちよくなってしまった今、得とか損とか関係なく、そうじをやめようとは、まったく思わなくなってしまっていたのだ…。

さて、それからさらに2ヵ月が経ったある日の午後のことだった。
正平がガスコンロの取り付け工事から戻ってくるなり、こんな話をした。
「リーダー。やりましたよ。一軒まるごとリフォームを取れそうですよ」
「お、そうか。えらいぞ。この2ヵ月くらい目標に届かなかったからなぁ。助かるよ。で、どんな案件だ」
正平は、ちょっと自慢げに話し始めた。





「三丁目の山口さんちのコンロが火がつきにくいって電話があったんでね、すぐに飛んで行って直してあげたんですよ。そのコンロ自体はすぐに直ったんですけどね。流し台の中が、汚れた食器でいっぱいなんです。山口さんちのオバサンはキレイ好きなのに変だなって思ったんですよ。そいで聞いたらね、最近、ギックリ腰をやっちゃって、前かがみになるのが痛くって、洗い物ができなくなってしまったって言うんですよ。それで、最近、そうじをしていると気持ちがいいのがしみついていたので、そのまま見過ごすこともできなくって、オレが全部洗ってあげたんですよ…」
「えらいじゃないの」
「そうでしょ。オレってそういうヤツなんです。へへへ。まぁ、続きがあるから聞いてください。それでね、皿洗いをしていて気づいたんです。流し台そのものが低すぎるんです。たしかに、腰を痛めた人には使いづらい。コレうちで使いやすく高さ調整して直してあげましょうかって。そしたら喜んでくれてねぇ。あのオバサンもういい歳でしょ。58とか言ったかな。たしか旦那さんも同い年とか。そろそろ、あちこち体

にガタがくる頃なんですよ。それで、ふと思ってね。家の中を全部見せてもらったんです。するとね、どう考えても歳を取った人には住みにくい家なんだな、これが。水道の蛇口は旧式で硬くて閉めにくい。風呂はすきま風が入ってきて寒そう。トイレなんて、いまだにシャワー付きじゃないんですよ…」

「ほほう」

圭介は、夢中で喋る正平の話に耳を傾けた。

「それでね、一つひとつ、将来、介護が必要になった時のことも含めてカラダに優しいリフォームを提案したんです。そしたらね、もうすぐ旦那も定年だし、老後のことを相談してた矢先だったってね。今度、ご主人のいる時に、詳しい話を聞かせて欲しいって…」

圭介は、この話を聞いていて、心が躍るのを抑えきれなかった。「新しい注文が取れそうだ」ということではない。

正平は、何度、営業を教えても「セールスができない男」だった。ガスショップと





いう業態は「リフォームを獲得するには大いに有利な業態」だといわれている。「飛び込み営業」や「紹介のセールス」をする必要がない。ガス器具をお買い上げいただいたお客様に、「設置のため」におじゃまする。その際、お客様に、床暖房や浴室暖房の話題をさりげなくする。子どもがいる家では、「受験のために勉強部屋の増築はいかがですか？」と提案する。ふだんの、何気ない会話の一つひとつが「リフォーム」の仕事に自然に繋がるので、強気なセールスをする必要がないのだ。

ところがだ。正平に、何度口酸っぱく言っても、うまくセールスができなかった。「子どもがいるから子ども部屋を」と教えたら、それしか言えない。「お客様のそれぞれの状況」を判断して、必要なものに気づくことが、なかなかできなかったのだ。

それがどうしたことか。今日の件は、「自分から提案した」のだった。簡単なように思えるが、「相手のニーズ」を読むのは難しい。このことに方程式はない。それだけに教えるといっても、一朝一夕に「一人前」にはなれない。

実は、そのことで圭介自身にも思い当たることがあった。

このところ「空き巣事件」がこの地域で多発している。聞いたところによると、鍵をしっかりかけていても、窓ガラスを割って手を入れて鍵を開け、堂々と入ってしまうという手口が多い。なんとか打つ手はないかと考えていた。

そこで、つい先日「増築工事」をしたお宅の窓ガラスに、「透明のビニールシート」を張ることを提案した。犯人が窓ガラスの一部を叩き割ろうとしても、なかなか割りにくい。割れたとしても時間がかかる。たったそれだけのことで、「防犯効果」が高いのだ。そんなことをテレビ番組で見たのを覚えていて、実践してみたのだった。

そのお客さんは大変喜んでくれ、隣近所に喋りまくった。おかげで、ほとんどサービスで5〜6軒のお宅の窓ガラスにビニールシートを張る羽目に陥ってしまったが、そのうちの、なんと2軒が「ガス器具」を買ってくれたのだ。少し遠回りではあったが、「売上」に結びついた。

圭介は、この2つが、偶然の出来事とは思えなかった。**「そうじをする習慣」の前と後で、正平だけではなく、「自分の中にも何か変化が起きている」のは、「実感」と**





**してわかる。**確実に、何かが違う。

（ひょっとして…）

これが、老人の言っていた「ゴミを1つ拾う者は、大切な何かを1つ拾っている」ということなのか。「そうじ」をしたせいで、売上が上がったのか？　ぼんやりと何かが見えてきた気がした。

## 9

ランチに出掛けるとき、社長の田中修に、一緒に行かないかと声をかけられた。何かものを言いたそうである。喫茶店でカレーライスを食べながら、圭介は言った。

「社長…、もう、そうじのことはいいでしょ」

「圭介、ごめん、ごめん。すごくよくやってくれてるよ。まさか全員でそうじをするようになるなんてな。キレイすぎて怖いぐらいだよ…」

「でも…、また何か言いたそうな顔してますよ」
社長は、苦笑いをして、コップの氷水をグイッと飲み干した。
「実はなぁ、ちょっとこの2カ月くらい、おかしな現象が起きているんだ」
「え？　何か工事にクレームでも」
「いやいや、そういうことじゃなくてな。まず、コピー用紙を使う量がガクンと減ったんだよ。庶務の裕子クンが気づいてな。毎月コンスタントに1箱注文していた量が、急に半分以下になったと言うんだ」
「え…、偶然じゃないですかねぇ」
「うん、それだけじゃないんだ。毎月買っていたゴミ袋の枚数がな、１００枚から30枚に、なんと3分の1になったそうなんだ」
圭介は言われてみて「ハッ」とした。このことは、毎日のそうじで、なんとなく気づいていたことだった。そうじを始めた頃に比べて、明らかに「社内から出るゴミの量」が減っていた。
社長は言った。





「圭介。これは間違いなくな、**お前さんがそうじを始めたことと関係があるに違いないとにらんでいるんだ…**」
「……」
「そうじはみんなでやっているけど、やり方はそれぞれバラバラだ。窓を一生懸命に拭く人。隅っこを徹底的にキレイにする人。同じ場所を何回も掃く人。でも、みんなそれぞれが、どうしたら早くキレイになるか考えながらそうじしているはずなんだ。誰でも時間をムダにしたくはないからな。その中で、打ち合わせなんてしないからわからないけど、一人ひとりが何か変った気がするんだよ」
「どこがですか？」
「うまくは言えんのだが…、１つだけ『ゴミが出なくなったという事実』をもとにして言うと、そうじをしているうちにゴミそのものを出さない工夫をするようになったんじゃないかな。なぜかというと、ゴミを出すと、結局、後で自分がそうじをしなくちゃいけない。なら、最初からゴミを出さないように工夫すればいい。例えば、封筒を開封した際の切れ端。ホチキスの針。そういった細かいゴミは、それこそ、今までは床に落としたこともあったかもしれない。でも、そうじを意識していると、ちゃん

とゴミ箱に入れる。コピーもだ。ムダを出さないように、無意識にミスコピーをしないようにと考えるようになったんじゃないかなって」

なるほど。そう考えれば納得がいく。最初は「ただ、そうじをしていただけ」だったが、何かが変わりはじめているのだ。

翌朝、老人を訪ねるため、圭介は30分早く家を出た。

暦（こよみ）では冬に入っていたが、このところ「小春日和（こはるびより）」が続いていた。その日も朝から、突き抜けるほどの眩しい青空が広がっていた。

老人はなかなか現れなかった。待つ間に、足元に捨てられた空缶が気になった。圭介は無造作に拾った。もう赤面することはなかった。たまたまカバンの中に入っていたコンビニのレジ袋を取り出して、1つ2つと拾いながら歩き始めた。そこへ後ろから声がした。

「おい、青年。わしの仕事を取っちゃ困るよ、ワハハハッ」

振り返ると老人が微笑んでいた。





「お久しぶりです」

「おお、久しぶり。元気じゃったかな」

「はい…」

圭介は、この2ヵ月で感じたことを老人に報告した。

老人は珍しく、

「ふむ…、ベンチに掛けよう」

と促し、ポツリ、ポツリと、言葉を選びながら語り始めた。

「いいかな、青年。本当はこんなことは教えることじゃないんじゃ。拾った者だけがわかることなんじゃ。拾った者だけがご褒美をもらえるとでもいうのかな。しかし特別じゃ。もう、キミには会えんかもしれんからな…」

「え？　会えないって」

「まぁ、聞け。お前さんはかなり答に近づいてきておる」

「はい」

「ワシは昔な、ホテルのレストランでウエイターをやっておったことがあった」
老人は遠くの空を仰ぎ見ながら話し始めた。
「ある夏の暑い日のことじゃった。1人の紳士が汗を拭き拭き入ってきた。それを見たわしはすかさず、エアコンの風が当たる席に案内した。えらく喜んでくれてな。チップまでくれたんじゃ、それもかなり多く」
「はい…」
圭介は、一瞬で、老人の昔話に引き込まれた。

「それから数日後にまた、その紳士はやってきた。前のことが頭にあって、迷わずエアコンの前の席へと案内をしたんじゃ。するとな、『バカモン！』と怒られた。なぜじゃと思うかな」
「……」
「その日も確かに暑い日じゃったが、紳士は汗1つかいておらなんだ。なぜなら、ホテルの玄関までハイヤーで乗りつけたからじゃった。叱りつけられた後で、その紳士はまだ若造だったワシに教えてくれた……。『仕事とは気づき』じゃとな。**『気づきをたくさんするためには、そうじをしなさい』**と言われたのじゃ。それでわしはそうじを始めた。早く出勤して開店前のレストランを嘗(な)めるようにそうじした」
「はい…」

「そのうち、何だかわからんがな…、今まで見えなかったものが見えてくるようになったんじゃ。お前さんの好きな理屈で言うとこういうことじゃ。そうじというのは、汚い所をキレイにするということじゃ。まず、汚い所を探すことが習慣になる。ウエイターの仕事をしていても、四六時中、フロアに何かゴミが落ちていないか気遣うようになったんだな。そのおかげで、お客様の忘れ物や落し物を何度見つけたことか。お客様が店を出る寸前に声をかけて渡すと、非常に感謝された。そして、もちろん、さっきのような過ちはせんようになった。**お客様が何を欲しておられるか、何を望んでおられるか、声をかけられる前に『考えて気づく』というクセが身についたんじゃ**。もちろん、何年も、何年もかかったな、これには…」

老人が若かりし頃、「ホテルマン」であったらしいことを初めて知った。そして、

その言葉には重みがあった。老人の言わんとしていることが、圭介には心の奥までストンと飲み込めた気がした。

「そうじをすると売上が上がるのか」。もちろん、すぐに売上が上がるわけではない。**そうじをする。そうじをすると、汚い所に気づくようになる。その「気づき」は、日頃の仕事の気づきにも生かされる。すると、お客様が自分のファンになってくれる。仕事が増える。これが会社全体で行われれば、会社の売上が上がることになる。**「風が吹けば桶屋が儲かる」ということわざと同じである。

老人は、ここまでしゃべると時計をチラリと見て、圭介の後ろに視線を移した。知らぬ間に、グレーのスーツの背の高い男性が立っていた。その男が言った。

「会長、お時間でございます。少し急がれませんと」

「うむ、わかっとる。ちょっと余計なことを喋り過ぎたかな…」

ポカンとしている圭介を尻目に、老人は「元気でな」と一言残して、男性とともに通りへと歩いていった。そして、ふと気がついたように10メートルほど歩いたところ





で老人が振り返った。

「おぉ、そうだ。1つ言い忘れておった。忠告しておくがな、実は、そういうわけで、そうじをすると売上が上がるんじゃよ。だがな、問題はそこにある。**『売上が上がるから拾おうとか、お金が手に入るから拾おう』と思ったとたん、売上が上がらなくなる。**これがまた不思議でな。このカラクリは、ワシもいまだにわからん。ワッハハハ」

そして再び、老人は、遠ざかっていった。一瞬、呆然としたところから我に返った、圭介は慌てて2人を追いかけた。木立の向こうに停まっていた「黒塗りのベンツ」の後部座席に、会長と呼ばれた老人が乗り込むのが見えた。まもなく車は動き出し、ビルの谷間へと消えていった。

# 10

出社すると、事務所に何人かのお客さんが来ていた。社長の田中と正平がソファーで対応していた。圭介が入って来たのを認めると、社長が大声で手招きをして呼んだ。

「おおい、山村君。お客様だ、ちょっと来てくれ」

圭介が駆け寄ると、3人の客のうちの1人の若い女性が振り返ってお辞儀をするなり言った。

「おはようございます。私、若葉幼稚園の藤沢淳子と申します。先生をやってます。こちらが、私の父です」

「どうもはじめまして。若葉幼稚園の園長をしております藤沢一郎でございます。娘からは、かねがねお噂を聞いております」

(え？　かねがね噂だって？)

首を少し傾げながら、1人、2人と、名刺を交わした。そして、3人目に名刺を交わした初老の男性は、この「商店街の会長さん」だった。商店街の夏祭りのイベント





に田中エナジーも社員全員で参加しているので、顔ぐらいは知っていた。

「いつもお世話になります。ところで、みなさんお揃いで朝早くから何か御用ですか？」

社長が、

「今、簡単にお話をうかがったところなんだがね。商店街全体で、『清掃活動をしよう』っていう提案にいらしたんだよ」

その後を受けて、かわいいパンダのイラストの付いた大きなエプロンを羽織った淳子が説明を始めた。圭介の方を、その大きな瞳でじっと見つめながら。

「田中エナジーさんがこの夏くらいから商店街のそうじをしていただいているでしょう。私、すごいなぁって感心してたんです。でもね、幼稚園もなかなか人手不足で、園児たちの送り迎えをしていると時間が取れないのが実情なんです。それって言い訳ってわかっているんですよ。だんだんと田中エナジーさんがそうじをされるエリアが広がってきて、自分たちもなんとかしなきゃって思ったんです。それを父に話したら、父から会長さんに話がいって…」

商店街の会長が小さくうなずいた。
「それを商店街の店長たちに話したらね、それじゃぁ、商店街全体で清掃活動をしようってことになったんです」
会長が言った。
「いやね、この前テレビを見ていたら、『商店街の活性化』は、まず、そうじからだってやってたんですよ。ゴミ1つ落ちていないキレイな商店街は、お客様がやってくる第一条件なんだって」
「それでね、田中エナジーさんに、清掃活動のリーダーになってもらおうという話になったんです」
社長は鼻が高いらしく、ニコニコしている。そして、
「こりゃ、山村君に任せるよ。彼はね、一番最初にそうじを始めた人間でね…」
「知ってますわ！」
淳子が発した大きな声に、その場のみんなが驚いて淳子の顔を見た。
「山村さんがね、この春ごろだったかなぁ。うちの幼稚園の前で空缶を拾われたんで





すよ。それもサッと自然体で。それを酒屋さんのところのゴミ箱へ行って捨てられたのも見ていたんです」
圭介は、もう穴があったら入りたい気分だった。あの日、生まれて初めて空缶を拾ったとこを見られていたのだ。
（しまった…あれは、気まぐれで拾った、最初の1個だったのに…）
「すごいなぁって、感心しちゃったんです。きっと、いつも拾っていらっしゃるんですよね。駅とか公園とかでも…。そういう人って尊敬しちゃいます。カッコイイですよね」
淳子の父親の藤沢一郎が、
「ずっと淳子はこればっかり言ってましてね。実は、まだ最近のことで威張れることじゃないんですが、うちの園児たちにも園内のそうじをしてもらうことにしたんです。これがまたご父兄のみなさんに好評でして。これもみんな山村さんのおかげなんですよ…」
「それは誤解ですよ、だってあの時は……」
と言おうとした言葉をさえぎって、

「そうなんです！　本当に、山村さんのおかげなんです！」
と淳子は圭介をキラキラした瞳で眩しそうに見つめたのだった。

結局、今度の商店街の例会で「商店街クリーンアップ作戦」なる企画が立ち上がることになった。「詳しくはその場でお話しましょう」ということで帰っていかれた。地域を巻き込んでの活動になることに、圭介は少なからず戸惑いを感じていた。なにしろ、自分は、「そうじをすると売上が上がるのか？　そうじをするとお金が手に入るのか？」という実験でスタートしたのである。いわば、「動機が不純」なのである。「社会奉仕」のつもりなんて、最初はまったくなかった。どうしたものかと考えていると、正平が近寄ってきて、耳元で囁いた。
「リーダー！　あの娘ぜったいリーダーのこと、好きですよ。いいなぁ、あんな可愛い子、うらやましいですよ」
圭介はまたまた赤面した。
「バ、バカヤロー。そんなわけないだろう！」
と言うのが精一杯だった。

後日、藤沢園長が改めて社長を訪ねてきた。子供たちの安全のために、今年の冬から床暖房にしたいという。「今からでも工事は間に合うだろうか？」という相談だった。幼稚園の冬休みの期間を利用して、「大至急で工事」をすることになった。そのほか、老朽化している水回りの工事をすべて引き受けることも決まった。これだけで、「かなりの売上」になる。結果、田中エナジーの社員全員が、今までで一番多い額面の「ボーナス」が支給されることとなった。**そうじをはじめて9ヵ月、売上が上がり、お金が手に入ったのだ。**そして、圭介は、ほとんど毎日のように淳子との「打ち合わせ」に追われるようになった。

そして、「クリスマス・イブの夜」、2人は初めて食事に出掛けた。

…年が明けて早々のこと。昼の休憩のときに正平が圭介に話しかけてきた。

「リーダー知ってました？　公園の近くで、ずっと工事をしていたじゃないですか。あの建築中の建物って、ホテルなんですってねぇ。この夏にはオープンらしいですよ」





「へぇ、そうなの」

圭介が、あの老人に会うきっかけとなったのも、「その工事」があって、迂回をしている途中で、公園を突っ切って近道をしようと思ったからである。**そう考えると、「その工事」自体にも、なにかの縁を感じていた。**

「それでね、リーダー。今日の新聞にね、そのホテルのことが載ってるんですよ。ほら、コレですよ…」

差し出された新聞を見て圭介は思わず息を呑んだ。あの老人の写真が大きく載っていたのである。それは誰もが知る「ホテルグループ」だった。創業者で会長という肩書きが、写真の下のプロフィールに躍っていた。

「どうしたんですか、リーダー。ねえ、リーダー！」

圭介の頭の中では、あの老人、いや「会長の言葉」がぐるぐると回っていた。

**「拾った人だけがわかるんじゃよ」**